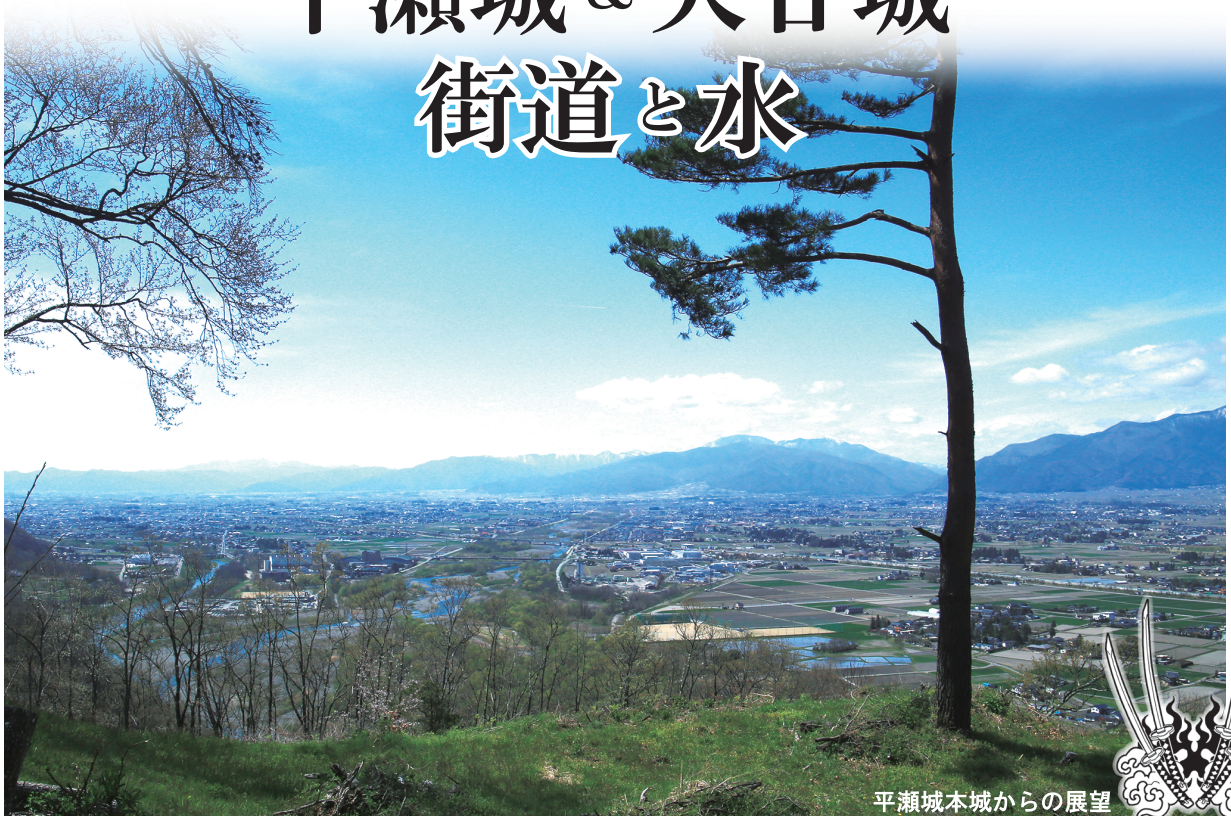


しまのうち
嶋之内の成立と発展

ひらせじょう いぬかいじょう
平瀬城 & 犬甘城
街道と水



平瀬城本城からの展望

しまのうち
島内地区は昔「嶋之内」と呼ばれ、松本市の北西部に位置し、奈良井川に沿った犬飼山(城山)丘陵地の麓と、奈良井川と梓川に囲まれた平地部からなっています。12世紀には平瀬の地に法住寺の存在記録があり、すでに集落が形成されていたと思われます。又、15世紀後半には犬飼、平瀬、小宮の三郷があり、その中心は犬飼郷とみられます。

戦国時代になると平瀬氏と犬甘(飼)氏は、それぞれ奈良井川対岸の丘陵地に山城を築きます。平瀬城は、奈良井川と梓川の合流点の東側尾根先に築き、水陸交通の要衝として掌握しました。犬甘城は、丘陵最南端部にあり、小笠原氏の林城の北西方面を守る支城の役目を果たします。

島内の地は、大町・糸魚川方面への物資の出入り口として重要な位置にあり、主要な街道が幾筋も通っています。両河川に囲まれた地のため、河川の氾濫には幾度となく悩まされてきましたが、その都度復興を繰り返し、今日の平坦地は松本平随一の水田地帯となりました。

この地に営みを廻らした先人たちにより、連綿と受け継がれてきた歴史文化は、「地域の宝」であり「地域の資産」です。これからも大切に守り、次世代に引き継いでいきます。

北山出城(砦)

至る山田口

松本市特別史跡

平瀬城跡

境沢 (番所沢)

川手口口留番所跡

本城

三の郭 二の郭 一の郭

虎口

帯郭

帯郭

堀切

北沢

山田道

往路登り約 20 分。細く急で滑るところあり、要注意。

大手道

犀乗沢

現在、南支城への登城路は未整備です。

南沢

南支城

三の郭

二の郭

一の郭

帯郭

堀切



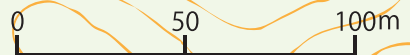
旧川手往還

下田

JR篠ノ井線

犀川

R19号



立地

梓川と奈良井川が合流する地点の右岸、犀乗沢を囲んで、北方に本城、南方に支城があります。さらに本城の北側の境沢（番所沢）の安曇野市との境の北尾根上には、平瀬城北山砦が散在しています。南方4kmには犬甘城（現城山）があります。

平瀬城の麓には下田の集落が広がり、犀川に沿って国道19号とJR篠ノ井線が通っています。この地域は、古くは養老坂を越えて府中北部から安曇へ行く街道筋の、犀川の渡河点です。この山麓を通る川手道は、境沢を越えて熊倉・吉野梶海渡を経て安曇野から大町方面に通じる往還です。平瀬は交通上の要衝であり、又、軍事上も無視できない地域でありました。

城の構造

犀川右岸に位置する平瀬山の西南及び西北に張り出した尾根の先端に造られた、馬蹄形の山城です。平瀬本城の標高は716m、比高146m。南支城は標高677m、比高107mです。

【本城】 主郭部は三つの郭に分かれています。一の郭が最も広く、南北と東側に土塁跡があり、枡形虎口が郭端に開きます。一段下った二の郭は土塁で仕切られ、三の郭はやや下り稜線部に達し、下界の展望が良く開けます。（表紙写真参照）大手は犀乗沢沿いの道で、搦め手筋の尾根は大小の立堀で守られていて、自然の沢を利用した堀や土塁を伴った馬出し風の小郭で、稜線からの侵入に備えています。

【支城】 主郭は楕円形で、東・西と南尾根筋に土塁を築いています。南側の上り尾根筋には幾条かの堀切が見られます。犀乗沢沿いに本城の大手に向かってくる敵を、横合いから攻撃を加える役割を担っていたものと思われます。

城主・城歴

『信府統記』（松本藩水野氏編纂享保9年（1724）完成）には「平瀬城主は明確には分らないが、平瀬和泉守信義という人がこのあたりを領しており、松陰（隠）寺を開基し、今も法名が残っていることから、犬飼氏の一類であった平瀬氏であろう」との旨意が書かれています。

天文19年（1550）、小笠原氏の本城林城を自落させ、深志城に本拠を置いた武田晴信は、翌天文20年、安曇地方平定のため、小笠原長時に属し抵抗を続けていた平瀬城を攻めました。

『東筑摩郡誌』（大正8年）には**【下平瀬城址】**（本城のこと）として「島内字下平瀬 本城の平東西四十二間、南北十二間、東西に堀切四通あり。往昔平瀬和泉守信義の居城にして、天文年間犬飼家の支族平瀬甚平義兼爰に居る。同十八年の秋（実際は20年10月24日）甲将大和越前守來り攻む。城将平瀬新之丞戦死して城終に陥れり」とあります。

『高白斎記』（信玄の軍師として知られる駒井高白斎の日記）には「十月十四日、村上義清が北安曇郡丹生子（大町市）に動いたのを察知し、これに備えるため、十五日晴信は甲斐を發し、二十日深志城に入った。二十四日小雨の中、平瀬城を攻略し、二百人余を討ち取った。二十八日には栗原左衛門（高白斎）が平瀬城の地割をし、鋤立を行い、十一月十日に原美濃守虎胤を城代にした」とあります。天文21年、小岩嶽城攻略の際、晴信は8月17日に平瀬城に入っており、平瀬城は深志城以北の最前基地でした。

近年、平瀬城の戦は平地説が唱えられ、この山の南方2.5kmの下平瀬の平瀬氏館（今の川合鶴宮八幡社の社地と言われる）が「高白斎記」にみえる平瀬城とする説もあります。

享保 11 年 (1726) 4 月、川手方面・安曇野方面の街道の抑えとして設置。熊倉番所とも呼ばれ、塩の道と川手道の分岐点である要衝地で、人と物の改めを行っていました。

熊倉中村から下田へ通じる犀川の渡し舟が往来し、昭和 30 年ころまで渡舟を見ることができました。熊倉の春日神社北側に、当時使用されていた渡し舟が残されています。

天文 20 年 (1551) 10 月武田晴信が平瀬城攻撃の際、陣を構えた所。西側に区画どりの段差線が南北方向に走り、平瀬城域を眼下に見通し、戦略上の要衝の地でもあります。

貞享 3 年 (1686) 多田加助らを中心とする安曇・筑摩の農民一揆が起き、その首謀者として囚われの身となった加助が、刑場への途中この岩で夫婦が別れを惜しんだと言われています。

平安の頃からの古刹。昭和 47 年に発見され発掘の結果、4 世紀末から中世におよぶ住居跡 89 軒、建物跡 13 棟他遺構や多数の遺物類、布目瓦、仏具等の傍証資料が得られています。

平瀬氏は 14 世紀の中頃、武将として名を文献史上に残します。その時点ですでに拠点とする平瀬の平地部に館の存在が考えられ、その後に平瀬城を構築したと思われます。

古代より有力士族として名を見せる犬甘(飼)氏は、町地籍に中世に館を構えました。館は一町四面の方形区画をとり、遺構が残ります。

軒梅山開善寺と称し、犬飼氏草創の寺。元和 3 年 (1617) 小笠原氏の明石への移封の際、犬飼半左衛門これに従い、寺住職も同行。寺跡に八幡殿と無縫塔他が残されています。

1 川手口留番所跡

かわてぐちくちどめばんしょ

2 熊倉の渡し

くまくら

3 陣畑

じんばたけ

4 加助惜別の岩

かすけ

5 法住寺跡(平瀬遺跡)

ほうじゅうじ

6 平瀬氏館跡

7 犬甘(飼)氏館跡

8 開善寺跡

かいぜんじ

熊倉の渡し ②

平瀬氏

史跡

小宮氏





市特別名勝 (城山公園) いぬかいじょう 犬甘城跡

立地

島内の町地籍に居館を構えていた鎌倉時代からの土豪犬甘(飼)氏の、蟻ヶ崎の平山城。府中小笠原氏に仕え、小笠原氏の本城・林城の北西方を守る支城の一つとしてその防衛線の一角を担いました。
その後城跡は、四方の展望を殊の他よくした立地のため、江戸時代後期の天保14年(1843)には松本藩主・戸田光庸が桜や楓を植え、領民に公園として開放されました。松本最初の市民公園です。

城の構造

平山城として、正平年間(1346~70)犬甘氏により築城と言われますが詳細は不明です。標高は678m 比高は108m。
信府統記によれば「本城東西十間、南北十五間、二の郭南北二八間幅四間程、三の郭東西十二間幅十間、北西は大崖なり…」とあります。郭・堀切・土塁等の遺構が残ります。

城主・城歴

信濃守護・小笠原氏に仕えた犬甘氏の居城。山麓の犬甘館を平時の居館とし、此の城は詰城と言われます。
武田氏の侵攻に対し、天文19年(1550)林城・深志城・岡田城・桐原城・山家城の5城が相次いで自落。小笠原長時は北信濃の村上義清を頼り落ち延びます。武田氏による信濃侵攻の際は、犬甘大炊助が守っていましたが、犬甘氏の不備を突かれ落城したと伝わります。
元和3年(1617)小笠原氏の明石転封に伴い、犬甘氏も同行したため、城の役目を終えました。



松本城大手門から今町～宮瀬～下田に至り、川手方面に通じる往還道。寛永12年(1635)以前には開道されていました。

川手街道から下田で分岐し山田に登る道。平瀬城の裾を廻る、交通の要衝であり軍事的にも重要な道でした。

安曇地方より松本の国府に通じる古道。平瀬・犬飼氏武将らの詰城としての御殿場への要路でもありました。

新橋～奈良井川沿い～八幡原～下平瀬川西寺村から渡河し、安曇飯田を経て糸魚川に通じていました。糸魚川方面からは松本道と呼ばれる塩の道です。町地籍の巾崎に「高良幅玉垂野水」の石碑があります。

新橋から青島西村～南中～大宮神社～高松中通りから梓川端に至り、島内地区内の集落を古から結んでいた道。渡河は舟もありました。

南中の南原で岩岡道と分岐。高松本郷～梓川端に至り、氷室への渡河は丸太橋もあったと言われます。

安曇郡内の平地部を通過する千国道の一つで、豊科～一日市場～七日市場～長尾の渡しから高松入りし、小宮を経由して島立ち方面に通じる古代道と言われます。

南中の南原で氷室道と分岐。高松南部～小宮に入り、ほぼ島堰と並行しながら梓川端～至り、岩岡への渡河は舟もありました。

高松に入るまで千国道と同方向を経由し、高松を南北方向に走り、島立小柴方面に通じます。昔から中通りと呼ばれ、誕生は鎌倉期とみられます。

牛道とも呼ばれ、新橋～土渡～北新～本道の野麦街道につながります。万延元年(1860)頃の道筋は、松本～荒井～堀米～北新～島々～大野川～寄合度～野麦から高山へ至るとされます。

街道

1 川手街道

かわてかいどう

2 山田道

やまだみち

3 養老坂道

よろろざかみち

4 旧糸魚川街道

きゅういといがわかいどう

5 長尾道

ながおみち

6 氷室道

ひむろみち

7 千国道

ちくにみち

8 岩岡道

いわおかみち

9 仁科道

にしなみち

10 野麦支道

のむぎしどう

泉小太郎伝説 《犀乗沢》



川手口口留番所跡
熊倉の渡し

川手街道

伝龍寺跡

法住寺跡

平瀬氏館跡

川合鶴宮神社

勘左衛門堰

拾ヶ堰

車屋堰

犬飼氏館跡

薬師堂

開善寺

八幡殿

大日堂

大日堂

長尾道

阿弥陀堂

中田道

榎木川堰

長尾の渡し跡

大宮神社

長尾道

氷室道

千国道

島堰

青島堰

高松堰

岩岡道

榎木堰

古宮神社

龍雲寺跡

仁科道



1 川合鶴宮八幡社

かわいつるのみや

延暦10年(791)7月勧請と伝わります。梓川扇状末端の微高地に所在し、周辺は平安時代末の平瀬法住寺跡や古代集落を窺せる遺跡が埋蔵される地帯。中世以降、平瀬氏の本拠地となった遺構も残されています。祭神は誉田別尊・気長足姫命・玉依姫命の三座。氏子は平瀬川西、上平瀬、平瀬川東、下田町会。

2 武宮神社

たけのみや

東筑摩郡誌によれば、長徳4年(998)4月勧請とあります。最初の勧請地は、現在よりはるか西方であったと伝わり、梓川の氾濫で移転を余儀なくされたようです。祭神は建御名方命・八坂刀売命の二座。氏子は町、北方町会。

3 大宮神社

おおみや

長徳4年(998)7月諏訪上社より勧請と伝わります。犬飼郷の地の鎮守の神、土地開発の神。祭神は建御名方命・八坂刀売命の二座。氏子は、高松、島高松、北中、南中、東方、青島、新橋、松島町会。

4 古宮神社

こみや

梓川の氾濫により度々移転を余儀なくされ、現在地には宝暦9年(1759)に建立。祭神は建御名方命で、境内に十社の末社があります。氏子は小宮町会。

5 鳥居火

とりいび

古来「鳥居火」といわれ、大宮・武宮の氏子【高松(のち島高松が独立)・北中・南中・青島(のち新橋、新橋から松島が独立)・下村(現東方)・北方・町・犬飼新田(現在は武宮から脱退)】八箇村の氏神祭典の前に行われる火祭り(4月14日町、15日東方、16日北方の各町会の氏子が担当)。大宮神社、武宮神社に奉られます。起源は犬甘氏により始められたとも伝わります。【松本市重要無形民俗文化財】



神社

1 梓川・奈良井川

梓川は槍ヶ岳を源流とし、発電と農業に古くから用いられてきました。灌漑のため多くの堰が造られ、松本平を潤しています。奈良井川は木曾駒ヶ岳の北、茶臼山北壁を源流とし、明治までは木曾川と呼んでいました。現在は、塩尻市と松本市の上水道用水としても利用され、拾ヶ堰は島内、勘左衛門堰は島立を取水個所として安曇野を潤しています。

2 拾ヶ堰・勘左衛門堰

じつかせぎ かんざえもんせぎ

奈良井川から取水。勘左衛門堰は寛文2年(1662)に、拾ヶ堰は文化13年(1816)に開削され、両堰合わせ1,324haの安曇野を潤す大水路です。

3 ワサビ田・湧水

北アルプスの伏流水を水源とし、町地籍崖下堰の湧水は水量豊富で、年間を通じ12~13℃を保ち、山葵田に活かされています。

4 造り酒屋

「笹井酒造」は明治38年(1905)創業。北アルプス山麓と美ヶ原の伏流水が合流する島内の蔵元。原料の主酒米は地元産の「ひとごごち」。

5 染色業

「白木染工場」は明治20年(1887)創業。伝統工芸の染色をしている松本唯一の染物屋。染色には、きれいで豊富な水が欠かせません。

水

泉小太郎伝説《犀乗沢》

善光寺道名所図会 卷之二より



やまとたけるのみこ やまとたけるのみこと けいこう

昔々、倭健御子（倭健命）の父 12 代景行天皇の時代、松本平から安曇野一帯はウミ(湖)でした。ここに犀龍という者が住んでいました。東の高梨（今の須坂市高梨あたり）というところの池には白龍王が住んでおり、やがて八峰瀬山（鉢伏山）で二人の間に男の子が生まれます。その子は日光泉小太郎と名づけられ、放光寺山（城山）辺りで立派に成長しますが、小太郎が大きくなるにつれ、母の犀龍は、自分の姿を恥ずかしく思い、湖の底に隠れてしまいます。

小太郎はこいしい母の行方を尋ね回り、熊倉下田の奥の尾入沢（島内平瀬と田沢の境）で、やっどめぐり合います。母の犀龍は、小太郎に静かに語り聞かせます。「私は、本当は諏訪大明神の化身です。氏子を榮えさせようと姿を変えているのです。お前は、この湖を突き破って水を落として、人の住める平地を創るのです」と言われ、小太郎は母犀龍の背に乗りました。この地は、今も犀乗沢と呼ばれています。

二人は、山清路の巨岩を突き破り、更に下流の水内の橋の下（久留米橋辺り）の岩山を突き破り、千曲川の川筋から越後（新潟県）の海まで乗り込んで行きました。こうして、安曇平の広大な土地ができたのです。そして、小太郎と母犀龍が通った犀乗沢から千曲川と落ち合うところまでを、犀川と呼ぶようになりました。その後、小太郎は有明の里で暮らし、子孫は大いに繁栄したということです。【信府統記】

泉小太郎には、中山の和泉で生まれ育ったなど、さまざまな言い伝えがあります。「深志」の地名の由来は「深瀬」の名残だとも言います。松本平が大きな湖であった頃の岬が、朝日村と山形村の境の横出ヶ崎、新村の岩崎、大町の木崎、仏崎、明科の押野崎、松本の蟻ヶ崎などだと言われ、入山辺には舟着場があったことから付けられたという「舟付」の地名もあります。